

# 街音の時間割

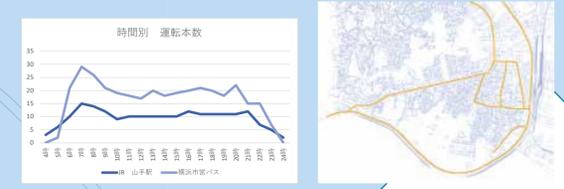
## 通奏低音の降るまち、本牧

携帯やミュージックプレイヤーなど技術の発展により、五感を塞ぐことでいつでもどこでも一時的他人優先空間に籠もることが出来るようになった。それにより人々は自然や日常生活のささいな変化に気がつかなくなったり、人々の間でコミュニケーションは極端に減ったように思う。そして変化のない毎日に対し、常に心の豊かさを求めて疲れてくようになった。

普段見過ごしてしまうような日常生活に溢れる豊かさを五感を閉じて感じる事が出来れば、わざわざお金と時間をかけて「インスタ映え」や流行を追わなくとも心を潤すことは出来るのではないだろうか。ささやかな変化やコミュニケーションがもたらす豊かさの力はきっと想像以上に大きいはずだ。

私が生まれ育った本牧は、穏やかで「特に何もない町」である。横浜の中心地でありながら出っ張った土地には電車が通っておらず、まちの中央を走っているバスが人々の交通手段の軸となっている。

右のグラフは平日に JR 山手駅から横浜駅までの電車の本数と横浜伊豆バス和田山口停留所(新本牧付近)から JR 各駅寄り駅までのバスの本数をまとめたものである。バスの本数から、いかにこの町の人々がバスを利用しているかが分かるだろう。所要時間はバスの方が多くかかるが、結局山手駅までもバスが必要なので結局バス利用者が多いのだ。また、そのバス通りの周辺は三溪園や八聖殿などの文化遺産や元米軍接収地、漁師町、港湾労働者向け団地など、地域によって表情を変える。



### 陸の孤島 「本牧」

陸の孤島とは

【Land of the island, an out-of-the way island, inaccessible land】  
交通が極端に不便で、周囲から隔離している地方や場所を指す。

本牧は最寄りの JR 山手駅までは丘を越えて徒歩約 40 分。そのため、バスを利用して横浜駅まで出してしまうケースも多い。

本牧の生活・文化

本牧は非常に古い町である。中でも、在日米軍住宅の存在でアメリカ文化を肌で感じ、ジャズなどの文化が広まったといわれる本牧は、まさに外国文化を最先端で受け止める国の窓口となった横浜らしい街とも言える。

①妻田町〜本郷町商店街  
古くから商店街として栄える。本牧漁港でとれた魚など鮮度の高い商品を扱う。

②マリンハイツ・ポートハイツ  
約 40 年前、海を埋め立て建てられた工場・港の勤務者のために建てられた団地。合計 19 棟

③新本牧  
終戦後、米軍接収地とされていた。1982 年に返還された後に、まちづくりが 実施されるが現在も欧米風の建物が建ち並んでいる。

④本牧元町  
かつて海に最も近い地域として多くの漁師が住んでいる。最も交通の便が悪い 地域

⑤間門・三之谷  
三溪園(原三溪の巨大庭園)によって元町とは区別られ落ち着いた住宅街。

### 音の空間構成・構造



サウンドスケープによる音の空間構成を街レベルで見つめ、観測する。測定する項目は以下の通りとする。

- ・交通の音 / バス以外の交通、車・電車・貨物列車などの音
- ・自然の音 / 木々の音、川のせせらぎ、風の音、動物などの音
- ・人間の音 / 話し声、生活音 (住宅内の音)
- ・工場の音 / 本牧ふ頭からの工場、港の音
- ・バスの音 / バス通り。(バスの音が街を繋いでいる事の証明のため)

以上の音を道路上に記録。どのような音で街が構成されているかを測定する。それにより今まで文化や歴史、生活状況によって区分けしていた本牧を『音』というフィルターを通して見つめ、区分けをする。



(a) 交通の音  
交わる道路がたいほど自動車の音が呼応し、影響力が大きい。時間によって最も音量変化が大きい。

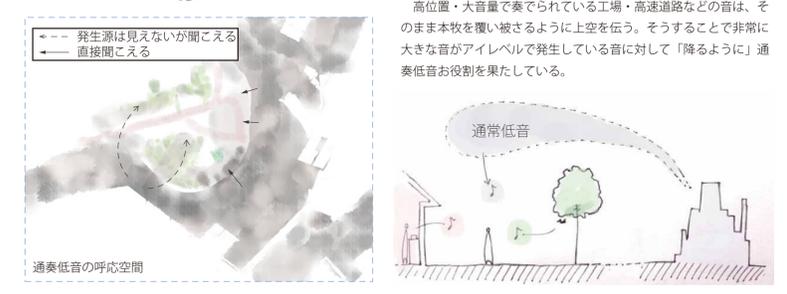
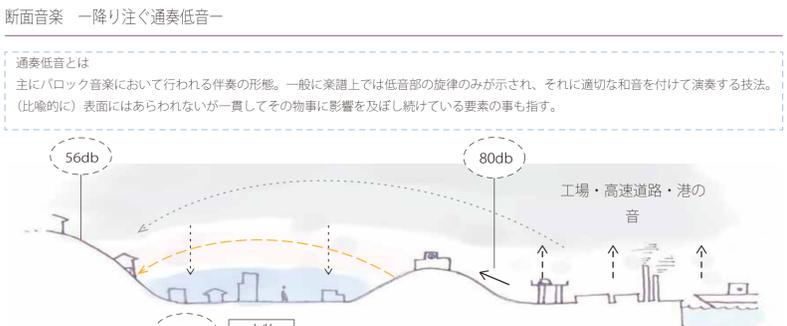
(b) 自然の音  
木々の音と地形が相まって、その他の音をかき消す。交通量と音量の兼ね合いによってはうるさく感じることも。

(c) 人間の音  
街と生活音の距離によって区域分け。学校による影響が大きい。

(d) 工場の音  
最も音量が大きく、街に音が鳴り響くが人々に感知されていないことが多い。

時間によって街音の主音が変わる。 = 街音の時間割

### 断面音楽 —降り注ぐ通奏低音—



### 陸の孤島の音を感じる街音停留所

私はバス停が非常に魅力的に感じる。

- ① 利用者同士の家が近い事が予想されるため、電車の駅に比べアットホームな雰囲気である。独特のコミュニティ。
- ② 視覚、聴覚的に著しく街の空間を害することがない。
- ③ スマホ、イヤホンを身につけない無防備な数分間。街の空間を感じる事が出来る。

一般的なバス停は電車の駅とは異なり、その土地の空気感を乱すことなく、バスを待つ数分間はその土地が持つ空間(生活感や自然・文化)にとっぷり浸り、人々は無防備な状態である。バスを待つ者同士が顔見知りでなくとも近くに住む者同士としての安心感がありアットホームなコミュニケーションが生まれたりする魅力もある。バスが街の軸になっている本牧においてバス停のような空間はまちの音を感じる上で適していると考えた。

人々が技術の音に埋もれる前の数分間、サウンドスケープ・音の空間構成という観点から聴覚→触覚の共感覚を通じて、本牧が生み出す音から日常空間に潜む豊かさを感じる事が出来る空間を提案したい。

